

アジ研流  
読書案内

—研究者が薦める3冊

私の薦める本

—温故知新・開発経済学—

山形 辰史

初老に足を踏み入れた人間の郷愁の故か、このような潮流の中で「薦められる本」を問われて、自分が選びたいと思ったのは、「古くて新しい著作」であった。若い方々には懐古趣味と取られるかも知れないが、それでも古い本の新しさを主張したい。

●展開する開発経済学

「開発経済学を専門にしている」と公言してきた。しかし、自分が思う開発経済学と、他人が思う開発経済学が一致する必然性はない。近年それを強く感じる。

誰が「開発経済学」の形を決めていくのだろうか。答は雑誌である。開発経済学のトップ・ジャーナルと呼ばれる雑誌に掲載された論文が、開発経済学を形成していく。ではこれまでどのような研究がそれらの雑誌の中心的テーマだったのだろうか。

一九七〇年代、開発経済学は国際貿易論だった。輸出指向工業化を国際貿易論で表現することが試みられた。一九八〇年代にはそれに、累積債務問題を分析するために国際金融論が加わった結果、国際貿易論と国際金融論からなる国際経済学が開発経済学となった。

一九九〇年代にはそれに経済成長論が加わった。そして今や開発経済学は、プロジェクト評価のためのミクロ計量経済学が中心となっている。この見方に触れたければ、Banerjee and Duflo [2011]を覗いてみるのもいいだろう。

この見方の中では、実験に基づく統計分析によってテストされない政策は、全て根拠がないかのように見なされている。例えばAnjiri Banerjeeは、世界銀行が無作為化実験や自然実験を用いて妥当性が認められたプロジェクトを採用しないことを嘆き、これら実験を用いた実証研究とそれ以外の実証研究は区別すべきだと主張した(Banerjee [2007:13])。このような主張をDani Rodrikは、特に実験結果の妥当性の狭さ(external validity)という観点から、たしなめている。

そもそも経済学は、科学の一部と呼ばれることを欲し、ポアンカレが『科学と仮説』(第九章)で、

科学の必要条件とした「仮説の反証可能性」を自らに課してきた。科学的分析とは、反証可能な仮説を立て、その仮説を立証したり反証したりすることである。その仮説が不明確だったり、立証や反証が不十分だったりすると、その分析は科学的と見なされず、雑誌に掲載されないことになる。

このような潮流の中では、反証不可能な茫漠とした問い、例えば「貧困削減はどのようにして達成されるか」とか「民主主義は理想的な体制か」といった大きな問いが軽視されがちになる。雑誌に論文を載せないと就職も昇進も難しいことから、知識の体系を構築することよりも、手続きの無謬の方が問題となるからである。

●渡辺利夫『成長のアジア 停滞のアジア』

現在の低所得国が経済発展を遂げ、貧困削減を進めていくとしたら、どのようなパターン、ストーリー、メカニズムでそれがなされるのだろうか。その問いに答えようとした時、今でも自分が最も妥当だと思えるのが本書である。本書は東アジアの工業発展のメカニズムを、ヘクシャー・オリーン的な静学的比較優位モデルと、動的資本蓄積による比較優位構造の変化から説明している。それにもなう要素価格変化と雇用創出により、貧困削減に至るメカニズムも描き出している。技術革新の過程は、ガーションクロンの後発性の利益が触れられる程度で、一九九〇年代に内生的経済成長理論等によって研究が進んだ技術革新や模倣の経済学は取り入れられてい

ないが、一九七〇、八〇年代の東アジアの発展パターンを描き出すにはそれで十分だったのではないか。そのうえで、貧困の罨から抜け出すことのできないバングラデシュを、「停滞のアジア」と位置づけた。

本書はまさに「古くて新しい本」である。その古さは、言うまでもなく、「停滞のアジア」の位置づけである。近年、バングラデシュのみならず、インドシナ半島の後発ASEAN諸国の経済成長と輸出成長が著しい。筆者は、山形編「二〇一一」において、特にバングラデシュとカンボジアの衣類産業の発展の姿を研究したが、両国の経済発展と貧困削減のメカニズムは、まさに渡辺が四半世紀前に描き出した、東アジア先進国・経済（韓国、台湾、香港）や先発ASEAN諸国（インドネシア、タイ、フィリピン、マレーシア）の発展メカニズムと同じものに見える。産業発展の口火を切ったのは、労働集約産業の代表である衣類産業であった。衣類産業は、相対的に豊富な労働に裏付けられた低賃金を競争力として輸出を拡大し、労働者たちは国際的には低くとも、彼らにとっては高額である賃

金を得て田舎に仕送りし、所得を農村に分け与えた。そしてバングラデシュやカンボジアでも、競争力を持つ産業が、徐々に衣類から靴や電気・電子製品、造船等へ広がっていく動きが見られる。

今にして思えば、渡辺が本書を「成長のアジア」で留め置かずに、「停滞のアジア」まで描いていたのは、今日その「停滞のアジア」までが、渡辺が言うところの「重層的追跡」をする日が来ることを予見していたからではなかったか。そう考えると、本書の意義がさらに大きいものを感じられる。

### ●高山辰「開発経済学の現状」

高山は、一般均衡分析や動学分析の名著として国際的に知られる『数理経済学』の著者である。渡辺の前掲書が現地から経済開発の姿を俯瞰する本とするならば、高山のこの論文は、経済学の全体像の中に、開発経済学を位置づけるという大きな視点を持った著作である。このサーベイを読むと、経済学の長い歴史の中で、経済発展がひとつの中心的な関心事であったことを再認識させられる。開発経済学は、経済学のような分野、例えば経済史、マルクス経済学、

経済成長論、国際貿易論、公共経済学、農業経済論、国際金融論、経済計画論から多くの着想を得ており、これらの学問の成果を借りつつ形成されてきた。しかも高山の解説は、開発経済学者が開発途上国向けにひとひねりした概念や論理を、経済学の王道からより簡単に説明し直すことにより、読者の理解がより深まるような説明がなされている。そもそも国際開発のために、（統計学でなく）経済学に何ができるのか、を根本から問うために、折に触れて立ち返るべき好著である。

（やまがた たつふみ／アジア経済研究所 開発研究センター「開発経済学」）

#### 《参考文献》

- ①Banerjee, Abhijit Vinayak [2007] "Making Aid Work." *Abhijit Vinayak Banerjee, ed. Making Aid Work*. MIT Press, pp. 1-26.
- ②Banerjee, Abhijit V., and Esther Duflo [2011] *Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty*. PublicAffairs.
- ③Poincaré, Henri [1916] *La Science et l'Hypothèse*. F. Flammarion (ポアンカレ著 [一九二八] (河野伊三郎訳) 『科学と仮説』岩波書店)。
- ④Rodrik, Dani [2009] "The New Development Economics: We Shall Experiment, but How Shall We Learn?" *Jessica Cohen and William Easterly, eds. What Works in Development?* Brookings Institution Press, pp. 24-47.
- ⑤Takayama, Akira [1975] *Mathematical Economics*. Dryden Press (現在は、ケンブリッジ大学出版会からペーパー・バックとして出版)。
- ⑥高山辰「一九八五」『開発経済学の現状』(安場保吉・江崎光男編『経済発展論』創文社) 二七七一―三五〇ページ。
- ⑦山形辰史編「二〇一一」『グローバル競争に打ち勝つ低所得国：新時代の輸出指向開発戦略』日本貿易振興機構アジア経済研究所。
- ⑧渡辺利夫「一九八五」『成長のアジア 停滞のアジア』東洋経済新報社 (二〇〇二年に講談社学術文庫として再刊)。